

旧大阪商船ビル

旧大阪商船ビルは、かつて世界各地を航路とした海運会社、大阪商船会社（OSK）の旅客待合所兼事務所だった場所である。1917年に建てられ、OSKが三井船舶と合併し、社名が大阪商船三井船舶株式会社となった後も、1991年まで支店として利用された。壮大な八角形の塔とタイル張りのファサードは、この建物を目立つランドマークにしている。

目を引く建築

このビルのファサードは、鉄筋コンクリートにレンガ調のタイルを貼ったもので、通りから離れたタイル貼りされていない木造の側面とは対照的だ。この建物は、屋根に沿ったドーマー窓や、ドーム型の尖塔を備えた八角形のスティープルなど、ゼツェッシオン様式の要素を示している。

建設当時、大阪商船ビルは門司で最も高い建築物だった。門司港が多くの海運会社で賑わっていた当時、ひときわ目立つ印象的なデザインは、OSKの広告としての役割を果たしたことだろう。目につきやすい建物は、OSKの存在を潜在顧客に印象付けたし、スティープルは会社の船にとって目印であった。

現在、建物の1階はコミュニティスペースとなっており、地元のアーティストや職人たちの作品を展示している。その近くにあるわたせせいぞうギャラリーは、神戸に生まれて地元で育った画家の漫画、広告、絵画などの作品と、彼にインスピレーションを与えたものを展示している。わたせせいぞう（1945-）といえば、1983年に連載された『ハートカクテル』が知られているが、このシリーズは、アメリカ西海岸のカラフルなポップ・アートと日本の伝統的な風景や場面を融合させたものである。隅にある小さな部屋は、彼の仕事を模したもので、製図机とレコードプレーヤーが置かれている。

1890年代を紐解く

1階の廊下には、世紀末当時の古い金庫が置かれている。この金庫は、19世紀末から20世紀初頭にかけて門司で営業していた商社のひとつ、三菱合資会社（現在の三菱商事）のために1896年に作られたものだ。錠の仕組みや文字盤は当時の典型的なもので、アラビア数字ではなく日本語の文字が刻まれている。見学者はこの金庫の鍵を開けられるか体験してみることができる。